

平成 29 年度 児童生徒の平和に関する図画・作文コンクール(審査員一同) 作文の部【講評】

今年度は、作文の部で小学校から 93 編、中学校から 6 編、合計 99 編の応募があった。厳正に審査した結果、小学生は、村長賞 1 名、教育長賞 2 名、優秀賞 4 名、入選 6 名が受賞した。また、中学生は、村長賞 1 名、教育長賞 1 名、優秀賞 1 名が受賞した。

この「児童生徒の平和に関する図画・作文コンクール」は、第一に「歴史の実相を次の世代へ正しく継承し、平和を尊ぶ心を育てること」、第二に「作文を書くという創作活動により、平和メッセージを発信する」という 2 つの趣旨で実施されている。

戦後 72 年の歳月が経った今、戦争体験者が高齢になり、「語り部」の方々も減少し、歴史の実相を伝承することが厳しい状況にある。だからこそ、本コンクールが「平和行政推進事業」の一環として企画される意義は大きく、作文の内容にもその趣旨が生かされ、児童生徒の平和を希求する思いが伝わる作品が多かった。さらに、これからの社会を生きていく上でとても大切な「表現力」の育成に資する貴重な機会となったことも高く評価したい。

作文審査については、内容を重視し、表現方法、学年の発達段階等も考慮しつつ、慎重かつ丁寧に審査し、下記のとおり講評する。

1.小学生村長賞、大湾有花さんの作文は、平和や基地に関する沖縄の現状と矛盾を感じながらも、恐ろしい戦争を繰り返さない・二度と子や孫を苦しめないように座り込み等で戦っている高齢者等への感謝の心を表すとともに、小学生なりの平和への関わり方や実生活での友達への思いやりなどを盛り込んだすばらしい内容である。

2.小学生教育長賞、平良心愛さんの作文は、小学校低学年生なりの平和に関する考えを堂々と述べるとともに、現在の世界の平和を脅かす危険な動向に対し、二度と戦争を起こしてはならないというシンボルである一本のデイゴの木への地域の方々の心情を描くことで、実に子どもらしい「反対」の意思表示を構成している。

3.小学生教育長賞、上原丸乃さんの作文は、冒頭で自分の考える平和について、し

つかりとまとめ、「慰霊の日」をきっかけにいろいろな機会学んだ戦争の悲惨さと現在の生活との違いを明確にさせながら、これからの自分たちがやるべき平和の担い手としての役割等を述べた内容である。

4.中学生村長賞、玉城光乃さんの作文は、悲惨な戦争体験をしたひいおじいちゃんのその後の生き方に丁度同じ歳の現在の自分を重ね合わせ、中学生としてどのように平和を築いていくかを真剣に捉えた内容である。ひいおじいちゃんが言った「戦争は人が人ではなくなってしまう。戦争ほど愚かなものはない。」を決して忘れてはならない。

5.中学生教育長賞、當山祈月さんの作文は、昨今の世界の明暗に関する情勢や悲惨な戦争の爪痕がいまだに残る沖縄の現状を真剣に捉えながら、中学生として、一人ひとりがどのように関わり、どのような方法で平和を築いていくのかを堂々と述べた内容となっている。

6.応募者は、平和学習で学んだことを通して作文に綴っているのが多かった。作品の内容は、平和の尊さや命の大切さをちゃんと捉えており、その思いが読み手に伝わってきた。児童生徒の平和への関心度と意識の高さを感じることができた。

7.原稿用紙の使い方はある程度改善されたが、誤字・脱字等の点検、文章の校正を丁寧に指導する等、作文に関する基本をさらに大切にしたい。

8.本事業への応募には、学校間や学年間の偏りがある。このコンクールでは「表現力や思考力」を伸ばし、言語感覚を磨き、伝え合う力を高めることも目指しており、その為には校内審査を含め取組態勢の工夫や協力をお願いしたい。